

---

# ダゲンブンゴ。

白紙描写

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ダゲンブンガ。

【NZカード】

N68881-Y

【作者名】

白紙描写

【あらすじ】

暇度を最大限に生かした…中途半端な作品を連ねた物です。

## ダケンワシ<sup>ハ</sup>

飽きてしまったのは、ぼくの所為ではないから…。他人の所為だから。

「もう何もかも飽きてしまって、遺ること無いな」

空気を吸つて吐くことだけは、一人前に飽きないのだが…

それを、ハイソレ飽きたと投げ出し止めること出来るはずがない。  
弱虫毛虫な自分しかそこには居ないから。

…こんな体験をした…

一度やり初めて、手に入れた、スキルも飽きてしまえば、活用する  
機会も遠のき、得た物は衰える。

手に入れても時間で朽ちる。その時、諭された一言。

諦め投げ出し飽かる。壁が在れば乗り越えず、碎かず、遠回り。

人生なんて語っちゃいけないのか…遠巻きにいって、退屈しのぎの  
茶番を開いて、楽しみ、のちにお開き。

生き甲斐を見つけてしまえば良い物の未練が邪魔をして、全身全靈  
を尽くせない。

「友達でも呼ぶか…」

敷かれた畳の上で飢えた蛙のよつなぼくは、お友達を呼ぶことになった。

仰向けになり、大の字で盛大とスペースをとる僕は、頭上に存在し得る形態電話を手に取った。

プチ

ぼち

貧弱そうな効果音と高らかに、聞こえさえ渡るキー音。

履歴から『友達B』と見て取れる表記カーソルを移動させ、コール。

ピリリリ

ピリリリ

⋮

耳元に小型スピーカーが埋め込まれて要るであろう箇所に当てると  
聞こえた。

数秒程か、あいつも暇を待て余しているのか、直ぐに相手の音声が  
聞こえた。

『はい、何だ。於川はどうした？今日も暇の同視か？』

於川とは、ヨリカワで僕の名前。親が携えた真名だ。其れ意外の名  
前は、あだ名。

同視とは、同士…つまり、彼も暇なのであらう。

「ああ、暇だ。取り敢えず来てくれ、」

「ふつ。

必要最低限のことはいつたし、あれだけ言えば、言われるままに来てくれるだろ?」

なんせ、あちら側も暇だとか言つてゐし。  
さて、此処から本題だな。

何して遊ぶかがこんにち重大な役目だ。 下手すれば、相手も三十分帰つてしまい… だださえ、あちら側から来ていらっしゃるのに、迷惑ではないか。

迷惑と言つ表現は、そのくらいの意味合いで値するつて事を意味していく、表現技法が可笑しい訳ではない。

「あ、そうだ。部屋でも綺麗にするか、」  
何もない部屋は、只でさえ、何もないのに… 只でさえ、物々しくなり余地がないのに掃除するのも、この世の末だな。

哀れとでも言いたいのか、掃除機だけは部屋の隅に、整理されている。

今週何度田の掃除だろ?」

覚えて居るはずもない。歯を磨くのだって、食べ物を口にした直後から三分以内に磨いているし… 其れ同等に、人一倍数が多い。

覚えて居るはずがない。

別に綺麗好きとか、潔癖症との類に分類される訳でもなく、ただ単に暇だからとか、遣ることがないから…の理由から動機は来ている。まあ。僕のレベルに成ると、同じ様なものだけだね。

逆に例えれば、これが今の僕のあり方で。すぐ飽きてしまつ症の僕からしてみれば凄く立派、世間体からも無害なよろしここと…。

けど、虚しさが後のせでかさばり積もつていく、心のどこかで…。

「今日は面白そつな番組遺つていいかな~」

近代化の進むこの国で、ハイクオリティー過ぎる番組の連鎖で見る人を混沌へと引きずる込むテレビの中の人達は、今日も元気に何かを遣つているのだろう、と。

基本、テレビに映る番組表しか見ない僕だが、今日はテレビの音を聞きながら、掃除をすか。

興味本意とはまた別の好奇心を乗せ、一階のリビングまで降りて観る。

「つモコン。リモコン」

友達だって、汗だくなせつかち野郎ではないため、気長にゆつたりと歩いてくるのだろうな…。

廊下、誰もいなく。何もない、玄関ドアが見えるだけ…。

は、リモコン。

於川は、ヨリカワは、瞬く間にリモコンを探せない。

「何処に置いたんだ。親め。」

基本。親とは、顔を殆ど合わさない。

両親は今。仕事中。

探し巡る…

お、いい感じ。

「見つけたぞ。」

地デジ対応中だから、複雑なボタンが二つりだ。  
どれが電源か。…なんて、誰でもわかりはするものの最低限の操作  
しかできない。

これが現代社会を生きるおれの最大限だ。

## ダゲンケンヒ。 2

ひとまず、テレビに電源をつける。

何かに没頭するに当たって、命を削るような感覚に捕らわれてしまい。それが思考、姿勢まで行き渡るから恐ろしいことだ。

その所為在つて今の僕は、とても燃え尽き灰のような感じ。

明日地球が滅びようとも僕はそのまま。維持し続ける。明後日に僕が死のうとも、誰も気づきはしないし、悲しみもしない。  
器用にそう生きてきた。

テレビに映る人達は、威力が在つて、淡水魚の様に活発。

所詮なんて言葉が何処ででも使えように、所詮、人間なんて。高が知れてて、所詮、僕だって何だって出来るわけではない。

リモコンでテレビを点けるだけの得しかできなくて、今から掃除をすることが、有すれない。

「音量を三桁まで上げるとじよ。」

このテレビ、音がかすんでもよく聞こえない、から。ボリュームを上げる。

何、隣近所迷惑が及ぶ筈がない。だって、防音機能に特化した。特別なコンクリートを壁にまたいで被さっている。その所為余つて、

何もしなければ、何も聞こえない。自分の心臓の音しか聞こえないのかも知れない。

「諦めて死のうか?」

まだ早い。やり残してきた物は、何一つだって無いが今はまだ：

大音量のリビングから少し離れた自分の部屋まで、歩く。

音は段々だが遠ざかるような感じ。他愛も無い討論会の音も高らかに僕聞き取る。

大丈夫だ。と自分に言い聞かせ、今日を乗り切る覚悟。

僕はいつもの部屋で、掃除機をかけた。

スゴー  
ズズ

図図と聞き取る僕の脳みそ。

今日の滑り出しは最高潮。波に乗った気分だ。ノリノリな於川は、住居の騒音迷惑を自負して、掃除機の吸い込み音を下げる。

何か、形に名るものでも残して、この世を去りたい。

その願いだけでも贅沢。

図図ガツ

どうやら、何か、掃除機のノズルに誤挿入した様だ。詰まって何も吸えやしない。

常識人。死ねと言えば死ねる人。

それが僕の脳内履き違え文書に刻まれた一説。ふと、思い出しだけだ。意味はない。

於川は、詰まつて居る何かを奢める。

意味の無い文役を整えるより、よっぽど増な物がカカズっている事に気がつく。

処でだ。友達について話して観よう。

属に言う友達とは、ちゃんとした名前があり、友達という名前ではない。ちゃんとした個性だつて備え付けである、薄型の電化製品に目がない。

あ、そうだな、彼の名前を薄型と呼ばう。名前なんて長つたらしくから、あだ名で呼ぶが一番だ。呼ばれるのは除外だけど。

「ああ、これが引っかかっていたのか…」

於川は、詰まつていてるブツを取り出した。掃除機にとつて、そのブツは異物や汚物。僕は優しくない生き物だが生き物ではない物には優しいのだ。

サイコロのような模様をしたトランプ質のカードの束が右手にあつた。

恐らく、カードの束は輪ゴムで束ねていたらしく、今は溶けてカードに蔓延る始末。

老体なゴムは、カピカピに干からびていて、いかに歪か解る。独特香りも楽しめる。

「懐かしいな。これ、よくあるあれだよな」

暗黙の了解を経て、遮断される語彙。

「昔よくハヤつたなー。」

昔は、そつ昔は、ガキの頃と古臭く言つか、子供の頃と懐かしんで  
言つべきなのか…

要するに、カードゲームだ。無邪氣で邪氣の無い無垢な人格の時に  
よくやつた暇つぶし、今は、遠い昔の別人な俺が使つていた玩具。

「ユニークなものだな」

ペラペラと、溶け出し付着し痕跡を残すゴムを無造作に取つ払い。  
中身を拝見しての感想。

著しく興味なさすぎる回答論。健在する僕とは違つて、子供なら觀  
るだけでゾクゾクしただろうに…。  
何だか、損した気分になる。

多分、昔つから俺は短才でただの子供だったのだろう。カードゲー  
ムを仕出かす僕、僕の友達もつられて遣つていった…いやはや、違う  
な僕が、自分自身がつられて影響を受けた。

流れ安いのではない。流れを変える気力や発想力が皆無だったの  
だろう。

おつと、着目する場所が間違つている。要するに即ち、昔はちゃん  
と楽しんでたつてことだけ、解れば充分だろよ。

カードの束を机の上に置き、掃除を続けるべく、自身に促しを駆ける。

「「」の行事もやれば大概は、楽しめる物だ。」

遣りだしは滑らか、その遣りだしに乗るのが困難。後は自然と飽きてしまつ。

掃除だって、ずっと出来るわけではない。持続する許容も限度があり、それは意識しなくとも抑止力が架かり、抑制される。

永遠に、永久に、物事を繰り返し反復出来るわけではない。出来たとしても、僕には当てはまらない。もし、そのような人間が居たのなら、それは人類が生み出した最終兵器だ。

崇められるのは、人ではない。物でもない。者ですらない。崇め称えられる代物は、仮想世界の民。

ズズ・

吸引を繰り返し反復するのは、掃除機の方で、有機物じゃ無い方の無機質とも言えよう。

溶かせば、要領が解る。素材だって、明らかに生き物じゃない方は、苦しみを知らない。

「掃除機、お前は、幸せそうで良いよな。寿命もまだまだ、残量いつぱいいつぱいつて感じで……なんと、云えばいいのか……愛もなくて、良いよな。」

寿命が尽されば、粗大ゴミ。人は、物には『便利』の一文字しか象徴しない。

だつて、人工に、樂をしたいから作った。それだけの理由で在るのだから、名前すら、正式名称で呼んでくれない、掃除機はどの掃除機とも共通だから…

綺麗にするのなら、何でも、綺麗にしてくれるのなら、少しばかりの人間。少数の人達の心を綺麗にしてあげたい。

そして、少しばかし汚らしい、汚らわしい世界を美しくしたい…  
「馬鹿な考え方だ。自分すら腐った人間に針は傾いていると言つのに…」

あだ名、『薄型』が来たら、まず始めに、掃除機で煩惱を吸い上げてやろう。その後、次から次へと… 買い込む音楽観賞用形態機器をもう少し、丁寧にして、貴重に扱うよう促そう。

そう、薄型が何に対しても薄く薄暗い様に…

ピリピリ  
ピリ

電話だ。

的確正確には、携帯のスピーカーから着信音が発生しているだな。

今日初めての携帯電話の呼び出し。

何時もなら、メールすら来ないし、迷惑メールばかりだ。因みに、友達からの迷惑しか来ない。

ネット環境が整っていない。携帯なのでそんなもんだ。

「はい?なんだ?」

僕は、基本真面目キャラを象っている為、そのような口調をイメージしてくれ。

於川は、苗字と勘違いされるほど、名前とは言え無い名前だ。親が『方人ーーーー』と書かれた紙屑を拾つたことから始まりらしい。

話がズレましたね。

於川は、手慣れた足さばきで畳に無規則に配置された携帯電話を親指で斜めつているホツチキスを空挟みして、畳まれた針のような模様のマークが表記されたボタンを押しながら、応えた。

『今。家の前』

プチ

対応無しに、状況だけ訊いて、横になつたホツチキスを空挟みして、畳まれた針のようなマークが表記されたボタンを押す。

そして、玄関に向かう。於川。

鉄腸のおれは、そう気安く信念を怠けたりさせない。

善美とは、美しいこと。けれども、それは同時に俺の名前でもある、

一  
善美。

偽名だけれど、これが俺の名前でなければならぬ。

なぜなら、それは「この世の生き方に関する」在り方と該当する。

自分の立場は、承諾している。

自分は、派遣された公務員と名のふられた高校生だからだ。

「今日もまた、新しい空気が吸えそうだ。」

学校という施設があり、今までの道のりがまた長い。

歩道と名が知れる公道は、ありとあらゆる所に空き缶やガムや雑草が散りばめられている。

この時代になると、これもまた芸術の範疇。良い感じだ。

空を観れば、空は青い。

雲が漂う空はまた一層青色。

歩き続けて歩き疲れた感じだな。  
ちよつこら、休むか。

善美は、なんだか物足りない和菓子屋のベンチに腰掛けた。

空がここで青いから、意外と落ち着く。  
喉から透き通る空氣に、息を吐き出した。涼しむと言いつつ、和む  
といった方がいい感じ。

「事件が曖昧で、ダルいからたちが悪い。」

事件とは、おれが派遣された理由であり、派遣された理由だ。

生きる理由とも言つても良い。

いい感じに、生きてきたのは、事件を解決するためでそれ以外は何  
もない。

「いや、在るな。」

在るのは、コンビニで買ったガム。ガムを噛むのは繰り返す作業で  
無情感捕らわれるから…

平然とガムを噛む。

の前に、棒状の袋紙から四角いガムを取り出す。

善美は、寂しげな表情を浮かべながら、ガムを口に含む。

「がり、」

美味しいとも美味しいとも言えない。いつもの味、調整された原料の材料。

下手くそが作るほど、は、増なのだけれど、これではただの同じ物。誰だつて、完成度を観てしまつて、在ろうな。

「魚鳴呼鳴呼鳴呼鳴呼鳴呼鳴呼」

言葉を喋る。さじ加減を間違えたらしい。絶対的ダメージのある奇声を上げてしまった。

俺は、我が物顔でベンチを蹴る。

銀の吟味。パーフェクトヒューリン（前書き）

とあり一角のメールの遣り取り、ギャルゲ式

## 銀の吟味。パーフェクトヒューティソン

作品名

『銀を吟味』

「暇か?アキラ」

ヨハネは、ぼくにそんな事を言つて、話しかけてきた。

自身…つまり、僕はアキラ

拙劣な名前だとは、昔から思っていた。親のセンスが解らない。この世に生を受け、一生縦掛けで生きていく記号なら。もっと、犯罪的は名前を附けても良いのに…世間のせざ波に弱い証か…

しかた在るまい。

「ああ、平凡な日常に蝕してゐぜ」

授業中だと云つのこと、サイドからアタックを仕掛けるなんて…眞面目な俺も運の匂きだな。

ノートにすらすりとい、先生が教科書を模写する文字を即し書き、連ねるのは僕だ。

つまり、先生が黒板に文字を書くから、おれは一通り、ノートにしているって事。お解り?

我に返つて、ヨハネの反応を伺つ。

「消しゴムを玄関に置いてきてしまった。貸してくれ……」

突つ込む、場所が限定されない。意味深なボケが炸裂した。

暇だから、消しゴムを借りるのか？ ロイツ？

それとも、消しゴムを玄関に置いてきてしまう要素を、ワザと分析させて、…「暇つぶしにでも成るだろ？ 考えて困惑して、困り果て死ね」とでもなる裏の意味をハラんでいると言うのか？

ロイツ…

- 1 せがむ
- 2 惣れる
- 3 シカト

1,2,3を選べ。

おれは、俺自身で主張するのを躊躇つ部類だから、口に出さなければいい。

愚かで賢くない訳ではなく。

賢さを評価したいわけでもない。

要するに、人並み。

なので、暇がどうか等の返事はしても暇つぶし等の話題には黙秘だ。

無言にて、授業を受けるアキラ。皆はクソ真面目に授業など遣つていない。そして、おれには皆無関心。

皆出はないな一人例外が居るが、無言時間が過ぎれば、関心はしなくなる…。

ヨハネとは、一、二度学校などの行事で付き合いがあるだけで、それ以上関係は好めないし、好まない。

女学生多し、学園だ。交友関係も適度でなくては居ないと。腐った奴らに、クソビッチな物語を描かれたら困る…からな。

元女子高の空気は品があつて、心中も貧で飢えている…。

信用でき…正しき、道を歩みたい僕だからこそ、勉学環境に適した校を選んだまで雑念なども煩惱などもない。

清き艶やかな日々を過ごしたまで…

その所為在つてか…友達は一人も居ませんがね。

「アキラは、シカトを続けるよつのですね…」

清楚なヨハネだが何かの餓えが見て取れる。

基本イイヤツなんだが…その理由も兼ねていることも確か。

- 1 シャーペンが折れる
  - 2 消しゴムが落ちる
  - 3 愛してゆつて抱きつく
- I/Eで2を選ぶ。

ヨハネとおれアキラのちょうど、間を射抜くような感じで、消しゴムはピタリと止まつたのだ。

この場面をなんて言あう?

非行中の不幸が重なり、ヨハネは

「あ、消しゴムがゴロっとしてますぞよ?..」

気持ち悪い語尾を追加し、氣色悪い表現技法を使つ。

あいつもあいつで、ひねくれている。

消しゴムをとつて、俺に渡しさえすれば、この局面では何事もないのだがちょうど間と言う位置とさつきまで、『ぼくは消しゴムに飢えています。』みたいな発言をしてしまったために…

、ヨハネが消しゴムを触る・同時に・俺が言葉の凶器を使つ・という式に、怯えてしまうのである。

例えば、こんな感じ

ヨハネ「消しゴム拾つてあげるよ」

おれ「あ、こいつ消しゴム無いからつて、こじれとばかりに、俺の消しゴムを…滅びれ！氏ね！」

ヨハネ「しゃん」

とりあえず、

おれの言葉を待つているのである。椅子と机の間で右往左往している。

そんな、ヨハネの言動拳動を見て、こんな悪口を思い出した。

原点越えて、沸点通り過ぎ、有頂天に辿り着いた際、天元突破して、鼻血垂らじて氏ね。

そして、どうするか？

1 「別に、使いたかったら、使ってもいいよ」

2 「さつせと、寄越せ。カス」

3 「いや、自分で採るよ、大丈夫」

「いいで2を選ぶ。

「これはお手柔らかに対応するべき判断、言葉は優しく丁寧に……でないと、ショウハシ先生にこいつべきじく注意されて厄介だ。

1 言葉を和らげる

2 そのまま、行く。

「いいで1を選ぶ。

目の前には死体が転がっていた、目の前だけではなく、あたり一面だ。

「また、やっかしたのかよ。」

俺は、ため息一つ吐くだけ。

当たり前のよう、「たゞ」、状況把握している。フラグを間違えたのさ。この結果は見えていた。

先生は、喚き散らし。括っていた…吊されていた鋸でみんなを斬り殺したのだ。

消しゴムだけで世界がこんなに豹変してしまつとは、参ったものだ。

「神様は、何処へ行つても、ついてくる…」

仕方ないな。

そう思いながらも、かさばって遣りにけい屍立ちをのけ始める有様を憐すおれ。

「この世界を後は、どう生きよう…」

手遅れとなつた世界で俺は、この世界でのみの有限なる時間をどう過ごう…

「家に帰るか…」

- 1 幼なじみの芋子の無事を確かめる。
- 2 家で姉が待っている、帰れる。

### 3 ヨハネを蘇生させる、

（死体が「ロリ」とか…、「リード」を選ぶ。）

この世界では、消しゴムがトリガーだったらしいな…

そう言い切るのは、消しゴムだけに鮮血が付着していないことから察しだ。

憶測…です。

まあ、おれ以外の人が死のうと其は、定めや運命で仕方のないことを言えよ。

おれも一、プレイヤーとしてだ。

大抵は経験済み、…今で二、三回かな？

覚えて居ないな。過去の記憶。前世の記憶と言つても良い。そんな物がそう簡単に引き継げる物ではないし、少々受け継いだこのおれも奇跡の類だ。帰るとするか…

と、その前に、過去の記憶からの絶対的女神の生存を確かめるか…

彼女は何らかの形で、手助けしてくれるヘルプボタンだ。生きてくればると助かる。

芋山 芋子。

『とうや』と読むんだよな。変わっている、…  
彼女は一つとなりのクラスに存在を潜伏させている。彼女の力は一般人には解らない。

とうや…即ち、芋子に会うべく。無生命体をじけるや退ける、その際、他人の血液は目障りなほど、ビリシリ。

まとめてこる。

やつといふせいで、外にでる、外と言つても廊下だ。

隣のクラスからは、普通の授業の音がする、

「まだ。授業中か…」

1 いきなり、入る

2 様子をうかがう

3 様子をつかがうと背後から…

(ワクワクドキドキ、じいじを選ぶ。

## 銀の吟味。2（前書き）

銀の吟味… 略して、ギンギリ

恐る恐る、拝見より少しおびえた感じの挙動で教室をたしなめる…  
おれ。

同じ様に、屈まる。

すると…

「一匹残つていたようだな。」

背後から、よく聞き慣れた、声よく通る先生らしい声が聞こえた。

くわ。背後かつ！

廊下に響き渡る間ではない。声のトーンで叫んでしまった。誇り高きアキラにとっては、不覚。

的確に一般人と比を改めるのなら、静まり返った教室で女性が優さんの物までをするくらい辱め。

そんな事はいいのだ、今は現状把握が打つ手だ。それ以外はタワゴト。

「殺してしまつもやぶさかではないが、いじめ殺させて頂きまや。

」

廊下に響き渡るトーンで先生は言った。

予言していたがやっぱり、先生か…

アキラは、かがんだ状態から一度、うつ伏せになり、対改めなおしだ。

立ち所によると、一寸背後は、隣のクラスが健在していて、今もなお授業が現在進行形で持続中。

（殺されてしまうのもやぶさかではないが…）の時点で隣のクラス略して、トナクラは何かの反応が在つても可笑しくないはずなのが、この世界の理論上、狂氣はバクに成るので、システム内でスルーされることが多い。

本当に不味いのは、先生がこっちを認知してしまったこと、トリガーと成る消しゴムは持ち合わせていない。所持していない。

辛うじて、先生はホウキの柄を持つてているだけで、鋸なんかと言つた極めて殺傷力の高い代物持つていないことが、不幸中の幸。

かと言つて油断も出来ない。互いを相似、対象角で向かい合つているが距離は詰められ、四メートルほど、先ほどホウキの柄と言つたが橢円型に斜め切りされ、鋭く鋭利な凶器と変貌を遂げている。

一事が万事。この言葉の意味はしらないが、なんとなく言つてみたかつただけの一言である。

時間も空間もない。

背後は、トナクラの住民。

前方は、竹槍使いの奇人。

どうする？

1 喘ぎながら教室に逃げ込む。

2 勇者を見習つて、シャープで戦う。

3 廊下の壁に設けられた掲示板を視察する。

4 ヨハネの再臨。

(期待するあまりに、ここで4を選ぶ。

狂氣が凶器を作り出すように、また、類は友を呼ぶのでは在る。

死ぬのは嫌いか？…と聞かれた時俺は真っ先に、死にたくはないし死ぬ勇氣もないと答える。

誰かに殺されるのは嫌か？…と聞かいたら、俺は迷わず、誰かが死ぬよりよっぽど増だと応える。

この場合の選択肢は、戦うが正しい。もし僕が主人公ならアッサリ勝つてしまつから…

主人公で無くとも、ここで死ぬまでの物でそれまでの物だったと勝手に解釈を附けて、勝手に逝ける。

基本、生きるも死ぬも難儀なことで…

「無言とは、お前も頭が悪い。バカみたいに、騒いでうめいて、逃げれば良いのに…」

同情の勘違いにも程がある。過度な言い草だがおれは、あえて、行動をとらない。

期待して、期待されている人物が居るから…

「無言無口と拳動停止。確実につまらない習わしだとは思わないか？」

クルクル、と竹槍を右手から左手に…

揺さぶつても無駄、だってその言葉の言動から隈が零れ見えているから…

俺が何しようが勝手。このゲームにルールなど無いから、ゴール何て無いから…

俺は俺らしく振る舞うだけだ。

「死に様。腸引きずっと肉片でも拌んでな」

すタツ

ヒンヤリと冷たいタイルを蹴る。これは視覚的な状態解析で実際に冷たいか、どうかなんて、分からぬ。

うつ伏せに成った時は、確かに冷たかったのは覚えて居る。

二メートルもない。先生との間隔。タイルを海と例えるのなら、海峡。

諦めを見せるのは、俺だけ。周囲は、タイル掲示板の張られた内壁天井の日本の蛍光灯の数々。

死ぬ際の走馬灯は、覚えて居ないな。そんなの知らない。

覚えて居ないなってことは、過去の物だつたから、過去とは、過ぎたことになり、走馬灯は死を覚悟したこと示している。

死を覚悟した時は、刃渡り一メートル五十センチの竹槍が腹を捻るように錐揉みを行いように、食い込んだ瞬間を意味している。

僕は死ぬのか…

はつきり言おう。死人は生き返らない。

願つたとしても、それた单なる願望で望まれない辻褄が合わない。

1 目を瞑る

2 諦めない

3 諦める

4 繰り返す

(はあ)、一一で4を選ぶ。

そうだ、もう一度やり直そつ。

アキラは又しても、死体の転がる教室で佇んでいるだけでした。

消しゴムがトリガーとしてもこんな使い方があったとは、…

更新する際に当たつての記憶の保存と言つわけか。

この世界のルールが解つてきたかのように思えた。

「とりあえず、消しゴムを手に取ることにしたよ。」

消しゴムを探る際に当たつてのヨハネの屍骸が横目で視界に入ったが、無視した。

期待しても、無理。この世界のルールがよく解る、死人は生き返らない。

けれど、誰も気づかないとは可哀想。

けど、おれはしっかり覚えている多分忘れるまで覚えているつもりだ。

「さて、芋子の助案や助言でも、聞き入れるようか…」

錆び付いた手すりの様な物腰で老化に出た。

「…」

正しい俺が解らない。この世界に合つた俺が必要はあるはず、そうすれば、厄介は訪れない。

頭を力キカキするふりをするアキラ。

「名前にヒントがあるのでは無かるうか？」

一世代前のマンガに出来そうなネーミング。おれはそんな名前をした人を見かけたり、死べつたりしたことがない。自分を置いて…

道無き道を飛騨すら前に向かうだけの様。

何も案外が思いつかない。

とりあえず、さつきみたいに繰り返すだけでは前に進まない。五、六回くらいは腹にぽつかり、風穴が空いたからな…初めは痛かったけど、慣れれば問題ないし、もう慣れた自分が居て怖い。

兎に角、何かアクションを起こしたいも、トナクラまでの境目が分岐。

命の梁を抑える物が立ち位置だと誰が思うだろ？おれは思ったが：

よく見てみれば、トナクラと俺たちクラスの境界には、クッキリ、空気の断片が見える。透明だが少し縁。

「なる程、これでは、とうやに会えないわけだ」

難易度を上げるべくよくある遮断線。  
とうやとは、頼れる女神、芋子だ。

あいつは、普通の女の子だからな。最初主要人物と特定するのが難しいかつたし、見つけるのも困難だった。

ふと、そんな感情がよぎる。これは記憶だ。

「授業が終わるまで、他を当たるか…」

断念した。

1 ナンパを仕掛ける

2 中庭に座る創造主を貶す

3 旧友の所へ

(紙現る、じいで2を選ふ。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n6881y/>

---

ダゲンブンゴ。

2011年11月27日09時59分発行